江戸のくらしと新宿 新宿の富士講 新宿歴史博物館 常設展示解説シート⑭

新宿の富士講

富士講は、原始古代からの富士信仰を背景に江戸時代に成立した民衆宗教の一派です。

まず、富士信仰とはその名の通り、富士山を霊山として崇めた山岳信仰です。その信仰は古く、平安時代より富士山は神々しくて高い尊い山、霊妙な神の山、日本国鎮護の山などと考えられていました。『富士本宮浅間社記』によると坂上田村麻呂が富士神を山宮から富士山本宮浅間神社の現鎮座地へ遷したとあり、富士神は浅間神と呼ばれ、富士信仰は浅間神社を中心に全国へ広がっていきました。中世になると、浅間神は仏教と習合して浅間大菩薩と称され、その本地（本来の姿）は大日如来であるとされ、浅間大菩薩の御在所とされる人穴（富士山の噴火でできた溶岩洞穴）、浅間大菩薩誕生の地と言われた胎内穴（出てくると再生されるとされた）の参拝も盛んにおこなわれました。富士登山は古くからおこなわれていましたが、室町時代になると参詣としての登山が確立し、富士山に登ると災難から免れられると堅く信じられていたので、江戸を中心に富士登拝が民衆に広がっていきました。

富士講の「講」とは宗教や経済・社交上の目的を達成するために組まれた集団です。殊にここでは、富士山を信仰する集団であり、「江戸八百八講」とも呼ばれるほど多くの講がありました。多くの講は、お金を積み立て、毎年何人かずつ参詣し、全員が登拝できるまで行われました。

では、富士講はどのように成立していったのでしょうか。まず、戦国時代の修験行者の一人で、富士講開祖と称される長谷川角行が人穴に棲み富士登山をおこない、諸国霊場を巡礼し、「おふせぎ」という守札を書き、「御身抜」という角行創案の独特の文字をもって書いた軸を与え、病気災難を逃れる呪術を江戸の市中で行っていました。その約 60 年後に角行直系の 6 世藤原光清と 3 世旺心の孫弟子食行身禄が登場し、両派に分かれてそれぞれ発展していきます。特に身禄は、呪術的な性格を脱却し、実践倫理を軸とした宗教思想を確立し、幅広く信者を集め信仰を拡大させていきました。

富士登山は、一般的に先達（講の指導者であり、登山時に一緒に上る人々の面倒を見る人）を中心に行衣と呼ばれる白装束に宝冠（頭を包み巻く白い布）、数珠、鈴、御身抜箱（御身抜などが入れてある）をもち、数日かけて登って行きます。

また、富士講の信仰は富士登山だけでなく、先達の自宅などで祭壇を設けお焚き上げをおこなったり、様々な行事をしています。

御身抜

行衣

祭壇

新宿の丸藤宮元講社（高田藤四郎を開祖とする講社）の富士登山の行程

《戦前の行程》

一日目－❶先達宅に集合。❷飯田橋の駅まで歩き中央線に乗る。大月駅で乗り換えて吉田で下車。❸御師の大国屋に行き、一泊する。

二日目－❶出発前に先達は御伝えを唱えながら禊をする（御師の家には昔はどこも富士山の雪解け水がごうごうと流れる滝があり、ここで禊をした）。❷吉田の富士浅間神社にお参りをし、お祓いをしてもらう。❸浅間神社の右側の登山口に角行、身禄、村上光清の御三体が祀ってあるほこらがあり、そこにお参りして登山の無事を願い、登山を始める。❹中野茶屋、大石茶屋を通って「お祓い所」まで行きお祓いをしてもらう。❺六合目まで登り一泊する。

三日目－八合目まで登り一泊する。

四日目－❶翌朝、頂上や八合目で御来光を拝む。❷須走から下山する。

《現代の行程》

■装束をまとう。講社以外の人は普通の登山用の服を着る。先達は大数珠を首からかける。

■持って行くもの

木花咲耶姫の像（厨子に入っている）、奉納金、ご祝儀、お茶代（講元がもつ）など。

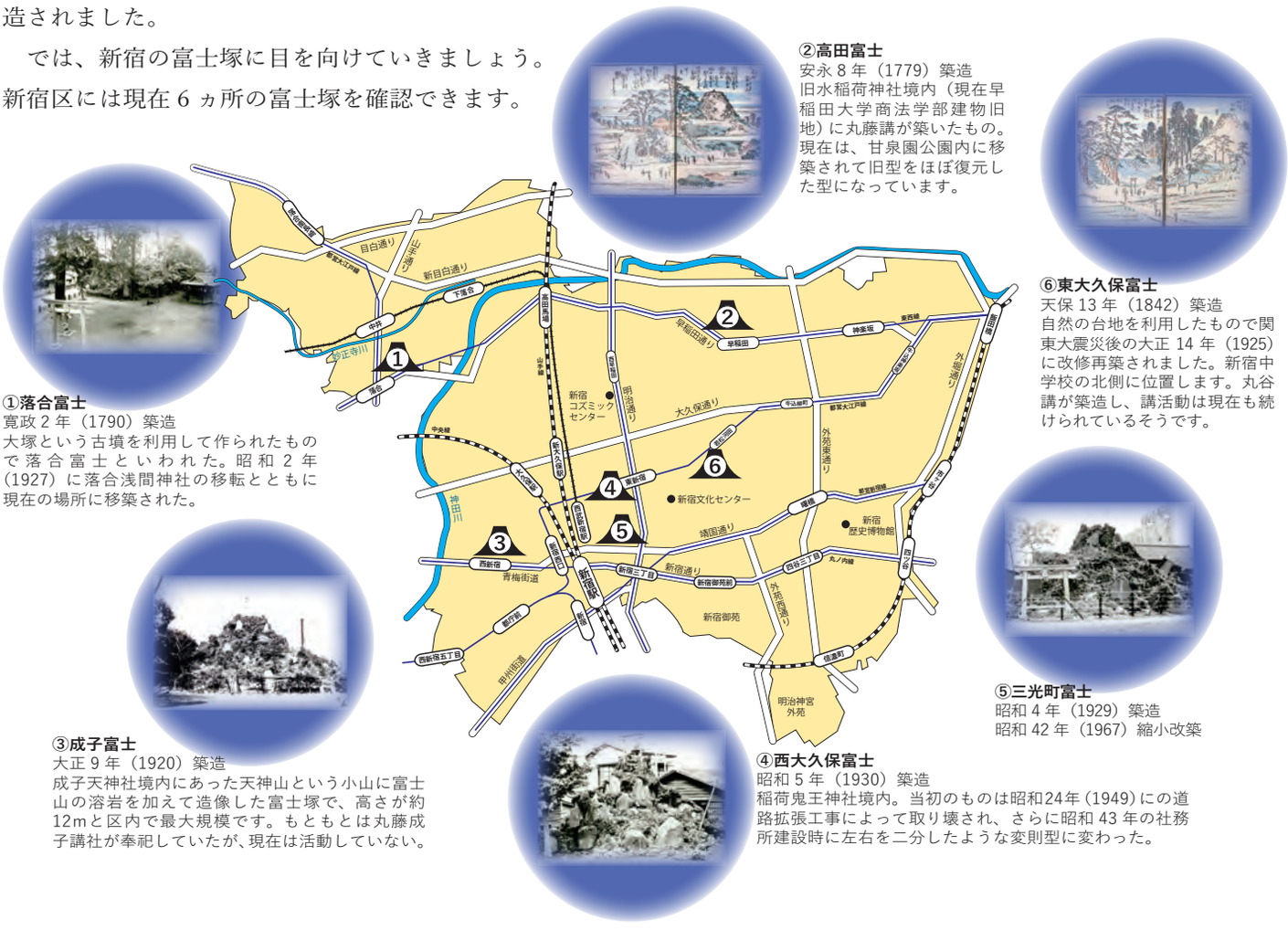
一日目－❶早朝先達宅に集合し、バスに乗る。❷中央高速で富士吉田の御師の大国屋まで行く。❸大国屋で登山の身支度をする（先達は家から行衣を着ていく。世話人も着ていく人がいるが、御師の家で着替える人もいる。この間しょい袋に入った木花咲耶姫の厨子は「上の間」の床の間に飾られる）。❹吉田の富士浅間神社に参拝し（時間がないので拝殿の中には入らない）、お祓いをしてもらう。❺浅間神社の右側の登山口に角行、身禄、村上光清の御三体が祀ってあるほこらがあり、そこにお参りして登山の無事を願う。❻ほこらの手前にある先代の先達の石像にお参りする（石像は昭和38 年に建てられる）。❼浅間神社の前からバスに乗って五合目まで行く。❽五合目の小御岳神社にお参りをし、登山道を登っていく。❾現在泊まるところは八合目の「元祖室」。ここは身禄が修行して亡くなった身禄堂（烏帽子岩の神社）である。

二日目－❶朝「元祖室」で御来光を拝む。❷「お頂上（頂上に登ること）」をして、北口の薬師神社をお参りする。❸それから天気次第で銀明水を通って奥宮に行き、頂上をひとまわりする。これを「お鉢巡り」という。❹それが済むと下山道から五合目まで降りて、御胎内参拝。バスに乗って御師まで帰る。❺御師で無事登山が終わったことを祝う「下山祝い」をして一泊する。この夜は河口湖湖上祭りを自由参観する。

三日目－観光地を何ヵ所か回り帰路につく（年によって行くところが違う。平成元年は、本栖湖、下部温泉で入浴、塩山ぶどう狩りだった）。

富士講では、ミニ富士「富士塚」をつくり参拝を行っていました。実はこの「富士塚」、新宿で初めて造られました。明和 2 年（1765）に身禄の三十三回忌の法要が行われた時、身禄の弟子の日行青山こと高田藤四郎が江戸の地に恩師のモニュメントを築造したいと発願し、現在の新宿区西早稲田の水稲荷社の境内にある古墳を基にして富士山を十数年かけて造りました。藤四郎の本業は植木屋であり、造園技術で富士の溶岩の塊を山肌に敷き詰め本物に近いミニ富士山を造り上げたのです。そして、できるかぎり現地に似せて、登山道、御中道の周回路、五合小御嶽社、御胎内洞窟等々を配置しました。これより富士塚の築造は盛んになり、江戸各所、その周辺各所へと広がってゆき、昭和戦前まで築造されました。

では、新宿の富士塚に目を向けていきましょう。新宿区には現在 6 ヵ所の富士塚を確認できます。



①落合富士
寛政 2 年（1790）築造
大塚という古墳を利用して作られたもので落合富士といわれた。昭和 2 年（1927）に落合浅間神社の移転とともに現在の場所に移築された。

②高田富士
安永 8 年（1779）築造
旧水稲荷神社境内（現在早稲田大学商法学部建物旧地）に丸藤講が築いたもの。現在は、甘泉園公園内に移築されて旧型をほぼ復元した型になっています。

③成子富士
大正 9 年（1920）築造
成子天神社境内にあった天神山という小山に富士山の溶岩を加えて造像した富士塚で、高さが約12mと区内で最大規模です。もともとは丸藤成子講社が奉祀していたが、現在は活動していない。

④西大久保富士
昭和 5 年（1930）築造
稲荷鬼王神社境内。当初のものは昭和24年（1949）にの道路拡張工事によって取り壊され、さらに昭和 43 年の社務所建設時に左右を二分したような変則型に変わった。

⑤三光町富士
昭和 4 年（1929）築造
昭和 42 年（1967）縮小改築

⑥東大久保富士
天保 13 年（1842）築造
自然の台地を利用したもので関東大震災後の大正 14 年（1925）に改修再築されました。新宿中学校の北側に位置します。丸谷講が築造し、講活動は現在も続けられているそうです。